

法学部創設五〇周年記念号の刊行に寄せて

著者	日高 昭夫
雑誌名	山梨学院大学法学論集
巻	72・73
ページ	1-3
発行年	2014-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1188/00002954/

法学部創設五〇周年記念号の刊行に寄せて

法学部長 日 高 昭 夫

山梨学院大学法学部が開設されて以来五〇年の星霜を経た。中国の大思想家、孔子の一生に擬えれば、「五十而知天命」べき齢を重ねたことになる。この間、法学部は長男長女役として、教育、研究、社会貢献、大学運営の諸般にわたり本学をリードする期待と使命を担わされてきた。「知命」に達した今、これからも、そうした役割をなお一層自覚して果たさなければならない、と決意を新たにしている。

日本社会における国際化・グローバル化の進展と少子高齢化・人口減少社会への移行が同時的かつ急速に進展する中で、五〇年前の困難とはまた別の新たな困難に本学は直面している。高等教育機関としての大学に期待される社会的使命が多様化するにつれて、本学また法学部に期待される社会的使命も大きく変化しつつある。法学や政治学・行政学を中核とした教育課程の編制やその運営のあり方にも抜本的な再検討を加えなければならない。そうした困難な課題（チャレンジ）に直面した時、私たちは、これまで先達の築いてこられた五〇年の来し方を振り返ると同時に、これからの行く末を見通す英知を備えなければならない。我が法学部の「天命」とはいったい何か。何を私たちの「天命」と定めるべきか。もちろん、「天命」などと大仰な比喻を使わずとも、社会から要請される新たな使命と表現してもよいが、ともあれこうした思索を巡らしてみること、この五〇周年を生かすことが必

要ではないかと思う。

グローバル化への対応は本学全体として取り組むべき新たな挑戦であると同時に、法学部としてもそうした観点からのカリキュラムの充実や教育内容・方法の見直しが必要となる。しかし、本学法学部に課せられた教育の使命は、むしろこれまで以上に「ローカル」な価値の再発見にコミットすることではないだろうか。グローバル化が文化的多様性を一層加速させる一面があるように、文化的多様性の承認は一層の「ローカル化」を加速する働きがある。「ローカル」というのは、国（中央）に対する「地方」とか東京に対する「地方」であるだけでなく、多様な環境・生態系・地理・風土・歴史・文化・社会制度を包摂した「地域」でもあり、目的地にまっしぐらに向かう効率優先の特急に対する日常の生活に密着する「普通」でもあり、管理された情報を集中制御するセンサーに対する生の情報の宝庫たる「現場」でもある。グローバル化によって多様な「ローカル」の価値が見直され再発見されると同時に、少子高齢化・人口減少化につれて、地域社会は多様でローカルなチャレンジにますます直面するようになる。こうしたローカルな課題を発見し、議論を巻き起こし、それに立ち向かい、そして克服するための提案や行動のできる、そんな人材を輩出できる大学法学部でありたい。

本学法学部が山梨という地方に立地することは、「ローカル」の価値が疎んぜられた時代にはハンディキャップだったかもしれないが、多様な「ローカル」の価値が再評価される時代には、むしろそれはアドバンテージになりうる。私たちの歩むべき道は、「地域に愛される大学・法学部」という先達の築いた大きな資産をさらに生かし、これまで以上に徹底して地域に根付き、地域にとけ込み、地域を刷新し、地域に貢献できる「地域の中核（center of community）」としての大学・学部として再生することではないか。それが本学法学部の「天命」ではないだろ

3 法学部創設五〇周年記念号の刊行に寄せて

うか。そんな「夢想」を抱きながら、法学部創設五〇周年を迎えている。

記念号の刊行の辞としてはやや異例な運びとなったが、本学法学部の直面する困難な課題に全員で立ち向かうべく、法学部の将来像について内外の関係各氏の議論と提案を賜りたく、この場をお借りしてお願い申し上げる機会としたい。

この記念論集を編むにあたり、本学法学部の設置認可申請当時の草創期から発展期までの長期間にわたりご尽力いただいた本学名誉教授の江川孝雄先生には、創設当時のエピソードを交えた本当に貴重な回想録をお寄せいただき、法学部教員一同心より御礼を申し上げます。また、資料の収集整理の労苦をお引き受けいただき「五〇年のあゆみ」をおまとめいただいた上條醇教授に御礼を申し上げます。この記念号の刊行に際してご寄稿をいただいた諸氏に御礼を申し上げますと同時に、編集の労を取られた各編集委員に感謝申し上げます。

二〇一三年